

昭和五十年五月十九日 講話

「感想を語る」

塾長 前川喜作

今夜は、ゆつくり諸君に、私が面接のときに話したかったことを交え、あまり堅苦しくならず、私も腰をおろさせてもらい、自由にお話ししたいと思うわけでございます。

まず、一年生諸君、おめでとう。諸君が望むところの大学に入られて、いままでの十何年間の学生生活の画龍点睛をおやりなさる、ほんとうのフィニッシング・タッチをなさる、最後の学びの学窓に入られて、そして和敬塾にお入りになって、誠に有難い縁だと、ご同慶に堪えません。

さて、現代の世界の置かれている政治、文化、教育、経済、いろいろな面、どの面を見ましても、これは並々ならぬ時代にあるのだということとでございます。

私も今年八〇を越したのですが、物心覚えてから約六〇年ほどの人生経験を経ておるのでございますが、その間、関東大震災、大震災後のモラトリアム、昭和初頭の大パニック、インフレーション、満州事変、大東亜戦争、敗戦、憲法の改正等々、あらゆる面で、もう日本は明

日からどうなるのだろう、といったような不安にかられた日が続きました。

いま、これらの経験の一、二をふりかえりますると、関東大震災のとき、私は、いまの通産省と農林省が一緒になっておった、当時農商務省というのがありまして、それが築地の精養軒の横のほうにあり、その役所にまいっておりましたところが、大正十二年の九月一日にガラガラッときた。そして、その水産局で剥製の魚類の大きなショー・ケースが大きな音をたてて、ぐらつとひっくりかえる。そしてひよつと

見ますると、精養軒の、近頃はありませんがね、鉄板製の黒い長い煙突がゆるゆると右や左に大きく二、三回振り動いて、いまにも真中の細くなったところから折れ倒れんばかりの様子でした。もちろん、私もジツと立っておれないような、目まいするような状態が何回も続きました。私はそのときにね、「地球の終わり」という題の東大教授（草野先生？）の朝日新聞連載記事で、天文学や宇宙、衛星、地震等のことを読んでおったものですから、「ああ、地球

の終わりとはこういうことをいうのか」という感じがしたものでした。

また戦争中は、「欲しがりません、勝つまでは」という気持ちで、あらゆる面で臥薪嘗胆、一億総決起ということとございました。私は戦地にはまいりませんでした。空襲には、会社、工場、自宅とも完膚なきまでにたたきつけられました。終戦間ぎわの約一年余りの間は、東京は第一線さながらの爆撃もあり、内地も戦場と変わらない状況でありました。

その後戦争の終わるときなんか、これは私のほんの瞬間的感想でございますが、進駐軍が進駐してきたらどうなるのだろうか、なども考えました。実は、私事にわたって恐縮ですが、私も子供たちに、お前たち早く帰れ。そして奈良へ帰れば吉野の奥に実家の膨大な広い山もあるから、山の中にかくれて生活して行け。まかり違ったら、いよいよになれば、蒸気船に乗ってでも日本海を渡って朝鮮なり満州に行つて、そして大和民族の子孫を絶やすな。東京で事故が起きたら、お父さんだったと思つてお

れといつて、子供たちを奈良へ帰した記憶があるのでございますが、その時分は私は真剣になって、こんなこと——痴人の夢のようなこと——を言っておったのです。おそらく塾生諸君も、おじい様らにお聞きになったら、ある程度それに似たようなお話がお判りになるだろうと思います。

こんな大変な変革を経てきたのですが、日本は幸いにして無惨な分裂国家にならないで済みました。もし大戦後の始末で、一番嫌われた日本が、一時は北海道はソ連に占領されるのだ、九州は中国にとられるのだ、あとに残るのはせいぜい本州と四国くらいに分裂国家になるかも知れないぞ、といったような気持ちでおったのでございますが、幸いそうはなりませんでした。諸君、その後、世界の分裂国家の悲哀はどうでしょう。近く朝鮮を見ますと、やはり同胞相食むような、偶然まぬがれて北のほうに逃げた南鮮の家族は、親兄弟とか従兄弟とかが敵と味方に別れて、いまでは対立しておるのです。ベトナムもそうでしょう。あるいはドイツなんかもそうでございます。

大正九年のあの第一次大戦後の後始末でウイルソンの民族自決によって世界の地図が塗りかえられた後で、また第二次欧州大戦でもう支離滅裂に勝手気ままに地図が塗りかえられて、敗戦国の民族はそれがためにいろいろの悲

劇を蒙っているというのを見て、その後、パキスタンにしましても、最近のベトナムにしましても、カンボジアにいたしましても、同じです。アメリカの占領政策にしましても、アメリカはアメリカの防衛のために日本を分裂しなかつただけのことだと思われてなりません。これは、日本は拾いものをしたわけでございます。幸いにアメリカが日本を守ってくれた。いや守ってくれたのではないのです。アメリカのいわゆる東洋政策——世界政策のうちの東洋政策、対ソ連あるいは対中国といった、——その当時は中国とはいってなかったでしょう、中共といっておった。——毛沢東政権に対する配慮から日本をアメリカの第一戦線、戦線の第一線障壁としてアメリカの世界政策が行われました結果、日本が拾いものをしたのでございまして、アメリカのトルーマンは、あるいはルーズベルトは、決して大和民族が可愛さに、大和民族の優秀さを認めるために、日本を分裂しなかつたのではないのであります。アメリカの世界政策を遂行するために、日本を分裂させなかつたのでございませぬ。

ともかくそれが大変幸福な現在の状況になつておりますが、これはお互い有難いことで、まあ実に有難いことだと考えます。いろんな面で拾いものをしたことは事実なのであります。さて、ここで、こういった悲劇を経験してま

いりました私どもといたしまして、つくづく考えますと、現在の時局は並みたいいのものではない。時局と申しましても大変短期的に見た、各論的な部分的なものではございませぬ、これから将来十年二十年はなかなか大変な時代に遭遇するのではなからうかと、私は考えています。私にはまだ幼稚園に通っている孫もあるのでございますが、孫を膝の上に抱くたびに、その童顔を見るたびに、この子たちは行く行くどうなるのだからかと、可愛そうだね、と思うことでございます。いわゆるビヨンド・マイ・パワー、自分の力では及ばない大きな荷物（運命）をしょっているのだ、可愛そうだなあ、という気持ちがいとも湧くのでございます。

おそらく諸君も、大変幸福な家庭に生まれられて、そして望む大学に入られて、いまはほんとうの人生の楽しみ、青春を満喫しておられるのだろうと思いますが、私には、これも束の間ではなからうか、おそらく諸君がこれから社会にお出になって、私のような年頃になられるまでには、大変な変遷、大変な激動期に遭遇されるのではないかと、かように感じられるのでございます。

これももし杞憂であれば幸いでございませぬ、私には決してこれは杞憂ではないと思えます。諸君、世界歴史をご覧になつたでしょうが、一体、西洋史をご覧になつても、東洋史を

ご覧になっても、日本史をご覧になっても、五十年と続いて平和であった時代はおそらくなかったのではなからうかと思えます。ベトナム戦争もすでに三十年もかかっているのですよ。いまから約八十年前の日清戦争から日露戦争、その後大正三年の第一次世界大戦から十五年後の支那事変まで、約二十年に三度、すでに大東亜戦争が終わりましてから、三十年たつわけですね。五十年を周期といたしますと、あと二十年の後には大変な時代がくるのではないかと、私は考えます。それではどういうデータから、どういう史学的説明からその予想がくるのかといわれても、私は未来学者ではございませんから、未知の世界を具体的に申し上げられません、何か第六感で、私は大変な時が来るのではなからうかという心配に堪えないのであります。

ところが、諸君はいまそのときに際会しておられるのです。そうだからといってあまり小さくなったり、ビクビクなさる必要はありません。またビクビクしても運命の悪戯には勝てません。「捨てる神あれば拾う神あり」と申しますから、また、その時その時の生き方に副って生き抜かれることと存じます、ただし二度とない人生をこういうときに際会される諸君は、やはりいまからそれ相当のしつかりした準備を持って頂かなければなりません。

そこで、ただおどかすようなことばっかり申して甚だ恐縮ですが、しからばどうすればいいのかという問題なのでございますが、まあ、まず、日本の現状を見ますに、政治を見ましても、経済を見ましても、労働問題にしましても、ジャーナリズムを見ましても、外交を見ましても、決して樂觀すべき状況ではなからうと、私は思います。

こんな日本のような国は、世界の全体から見るときは、まるで賃加工をやっておる中小企業ですよ。日本は資源は何もありません。ただ日本人が優秀な民族でもあり、勤勉な民族であるけれども、なかなか大変な時代に遭遇しておるのだから、いまは敢然として難局をきりぬける強い覚悟でやってもらわねばなりません。このあいだは四日も五日も国鉄のストがありましてね。鉄道に勤めておる人たちは、これはもう完全就職でね、お天道さまと米の飯はついてまわって、実に甘やかされておる。それを一部の誤れる訳の判らない、ただ自分の私利私欲のためにつっぱしっている一部の労働ブローカーのようなもの、なんとか委員長、なんとか組合のリーダーなどに煽られて、親兄弟の足を奪って、得々としてストライキをやっておる。物価高、物価高といつて、鉄道の運賃を値上げしてはいけないのだ、そして俺たちの月給だけは値上げしろ、値上げしないならば、俺たちはスト

ライキをやるのだと。また、それを、一部の新聞を除いては国家の木鐸たるの使命を放棄して、かえって煽動するような論調、報道をするものだから、正見のない大衆はごまかされるか、あきらめて泣き寝入りになってしまふ。

また、政党は政党で、票を得ることが至上命令ですから、まずいことをまずいというだけの勇気もなし、行政当局もまた明哲保身を第一義として、結局フラフラしてやっておる。経済界だってそうです。いろんな点で、実に累卵の危きにあるのではなからうかと思う。私は大変な悲観論を持っておるのです。

諸君はそういった危険な時代に生まれ合わせて、その代わりに激変に会いうるチャンスを得られたのだ。禍を幸福としうるようなチャンスにめぐり合わせたことを、自分でもむしる誇りとして、こっちから立ち向かって生き抜けるだけの準備を整えておいて頂きたいと、かように存ずるものでございます。

それで、これから社会に出られたなら、いずれのグループに属されるか知りませんが、何を職業になさるか知りませんが、少なくともかかるべき部門におけるリーダーとして、指導的立場に立つて世の中に生きて行かれる諸君ですから、それがためには十分な準備——資質・適格——を備えておかなければなりません。

いま、これらについて手近なところから申せ

ば、まず健康です。『孝経』に、「身体髮膚これを父母より受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり。」という句があったと思います。が、身体の健全保持は「孝」になるとともに、諸君の社会活動の前提要件であります。この健康を守り、殺されても死なないという、殺されても死なないのではないが、殺されるような目にあっても死なないのだということ、それだけの体力を養っておいてほしいということです。

つぎに知性を高める、学問・知識を修得することです。そのために勉強することです。そして判断力と申しまするか、信念と申しまするか、哲学と申しまするか、人生観と申しまするか、そういう人生における貴重な識見を養ってほしいと思います。それとともにまた、一方で「ものあわれ」がわかり、てんめんたる情緒、豊かな情操という心情の美しさというものも備えてほしいのであります。知と情と意とを兼備してほしいと思います。

ところで、さらにその知性の開発ですが、諸君は知性を、ただ人から、または新聞等のマス・メディアからの単なるインフォメーションとして簡単に得るだけでなく、自分が直接、大学での講義はもちろん、図書館の書物で得るとか、共同生活において友人とディスカッションをして得るとか、当面する問題について自分として考えぬいて得るとか、いわゆる懐疑者のこ

とく思索を尽くして得るとかが必要で、こうして涵養した知性は自分の血となり肉となるもので、一生自分から離れません。これが知性の裏付けされた信念となるものであります。いわゆる教養を身につけることであります。

しかし、また、知性があり、また知性に裏付けされた信念がありましても、それが行なわれなければなりません。また、知性に裏付けられなくても、情緒的・情操的の面がしっかり裏付けられないと、信念も行なわれたいと思います。知行合一といわれ、信者のごとく行動するといわれまするが、正しい知識、信念は、美しい実践、行動とならねばなりません。

和敬塾の人間形成は単なる知識の偏重を採らず、塾生活において以上のような意味の健・知・情・信・行を修得、練磨するものであります。

これらさえ備われれば、これはもう天地鳴動しようとなしと、泰然自若たるといったような心境になりうると思うのです。私も随分いろんなことにも遭遇いたしました。これは戦争中も戦地へはまいりませんでした。爆弾のもとでも、もうB 29 がぼんぼんぶんげるなかを、自分の目の前で炸裂する油脂焼夷弾を消して、いろいろな戦闘行動をやったのであります。私は人間の力って、恐ろしいものだ、自分でも、自分ながら思い起こしておるのでございま

するが、内にしっかりしたものさえあれば、そんなに間違ったことはないと思うのです。

これは、決しておどかしではありません。昭和五十年五月十九日に塾長は、あのおいちゃん、こういうことをいったな、ああ、これかなあ、と思うようなことが将来きつとおありだろうと思う。

私のささやかな経験からしますると、一つの企業とか地域社会で、ふだんは分からないが、いざというときに、右するか左するかというときに、何かを持っていて、判断を誤らないのは、まさに大学を出た人です。諸君もその一人なのです。だからね、ここで諸君はしっかりとさっきいった知性の裏付けを持った哲学なり、人生観なり、信念なり、宗教的信念なりを持って、何かしっかりしたものをぐーと持って、再びやり直しのできない人生を最も有意義に送ってもらいたいのであります。「棺を覆って事定まる」といいますが、いかなる運命に遭遇しても、いよいよ死に瀕して後悔のないような人生を送っていただきたいと、かように存ずるのでございます。

当塾では、特に「宗教的信念」ということをよく申しておりますので、新入塾生にはこれをよく理解していただきたいと思えます。一体、道徳だとか、法律なんて、人間がつくったもの

です。そうでしょう。アメリカが西向いて鉄砲を打つのがアメリカのジャスティスだった。日本がアメリカの軍艦に爆弾背負ってぶーとぶつかって、アメリカの軍艦をつぶして、いのちを捨て、親兄弟を捨てて華と散るのが、日本のほんとうの最高の道徳だった。それゆえに、戦争で戦死された人は靖国神社に祭られた。神に祭られた。それが戦争中のお互いの道義観念であつたのであります。ところが、いったん戦争が過ぎましたらいかがですか。そんなこと今やったら、大変なことですよ。

そんなものは地域と時代とによつて千変万化する。道徳や法律等は皆人間がつくつたもので、仮のもの、一時的のもの、うつろいのものであります。どうということはないのです。けれどもこれを取り越えた、これのもう一つ上のほうのゾーンを見て、ほんとうの真理を、ほんとうの真実を、ほんとうのものを相手にしなくつてはいけないのだと思います。それは何かと申しますと、私はやはり時間や空間やその他あらゆるものを超越した絶対の真実、これを人格化したものを神というのでしょうか、あるいは仏というのでしょうか。仏さまや神さまを相手に、仏さまや神さまと相談せずに生きる——これを相手にいかない限り、人間と人間との話し合いを相手にしておいた日には、危なくて生きて行けないのだ、ということですね。「世間

虚仮 唯仏是真」とは、聖徳太子の教えです。そこで、和敬塾はこの宗教的信念を基調とした人生を送ろうではないか、こういっておるので、決してキリスト教を信じるとか、仏教を信じるとか、そんなことをいつているわけではないのであります。学問を勉強しているいろんな角度から、自分の頭にやどっておる神、仏、真理、そういったものをほじくり出して、それに従つてそれとともに生きるのです。

それを重ねていうならば、神さまと仏さまとの相談せずに、こうしたらどうでしょうか。彼はああいいですが、私はどうしたらよいでしょうか。こうしたらよいでしょうかとよく考えて、そして頭の中にある神ですか、仏さまですか、あるいは真理ですかに従つて生きると、そうして「破れて悔いなし」という気持ちで生きられることこそ、私は人間として一番正しい、一番強い、一番善い、一番美しい人生の生き方、いわゆる聖なる生き方かと思ひます。それよりほかに、私は生き方がないだろうと思うわけでありませぬ。

次に、感謝ということについて一言申し上げて見たいと思ひます。諸君のまわりを見まわしてほしい。まず空気を始め、生命の営みに欠きがないいろいろなものがあります。太陽がもう日々時間がきたら東から昇り、時間がくれば西へさがり、そしてゆっくり安息の夜というもの

があり、またその安息の終わった明るく日の活動を諸君にエンカレッジするために東からほのぼのと太陽が上つてくれるのだし、熱があるのだし、五風十雨、かわるがわる寒さも暑さも変わつてくれるので、これはまあ、実に有難いことです。また、花は慰めてくれるのだし、鳥の音楽はお互いの情緒を誘つてくれるのだし、私は大変有難いと思うのですがね。有難いという気持ちを持つてもうることが、やはりさきほど申しました宗教的信念という、そういったものの信念ではありませんが、やはり宗教的ムードと申しますか、気持ちがそこにあるのでございませぬので、この有難いという気持ちを頭にもつてもらいたい。和敬塾の諸君は、有難いという気持ちを持つてもうりたい。

すべてのいろいろな、情操といひまするか、徳目といひまするか、生き方といひまするか、いろんなものがありますか、勇氣といひ、あるいは理性といひ、奉仕といひ、あるいは誠意といひ、親切といひ、友情といひ、いろんなものがありますか、結局は、感謝といふところからすべてがずーつと出て行つていゝのではなからうかと、私はさように考へておるのでして、感謝ということをしよつちう頭に置いておいて頂きたい。

また、幸福ということに、ちよつと触れて見たいと思ひます。「諸君、人生の目的はどこに

あるのですか。何がために生きていますのですか」。私は、ほんとうの人生の目的は幸福を求めるのだらうと思う。幸福だらうと思う。別にお金をもうけるわけでもなく、名誉を得ることでも何でもない。窮極のところ、めいめいは幸福を求めるのだらうと思う。ところが、この幸福というのは、金持ちでなければ、位人臣をきわめなければ、あるいは力がなければ、幸福が得られないのではないのです。幸福なんてもは、そこらに充滿している。誰でもとれるものです。もし特定の人でなければ得られないものであるとするならば、幸福の要素がそんなものであるならば、それはほんとうの幸福ではないでしょう。幸福なんて誰でも得られるものです。要するに、自分の心の世界なのだ。自分のもの考え方なのだと思う。お金がたくさんあるからといって、それはいくらか便利でしょうね。でも、それは決して幸福ではないと思う。金なんかなくたって、ほんとうに満足し、幸福になれる。いろいろ幸福という言葉があるのでですね。私もアメリカナとか、いろんな百科全書を見たり、日本の辞書を読んだり、心理の本を読んだりしましたよ。

結局、幸福というものの心理学的な要素は何かといったら、不安がないということ、心配がないということ、そうして不平不満がないことだと思ふのです。それは私の勝手な考え方なので、少なくとも幸福というのは不平不満がなく、そして心配がないこと。戦争が起きはしないだらうか、病気をしないだらうか、いろんな心配がある。この心配さえなくて、そして不平不満がなければ、幸福なので、これはどなたでも自分の心の持ち方一つで得られる境地なので、ある特定の人に与えられた特権でもなんでもなかるうと、かように私は考えておるのであります。皆さんも塾におられて、感謝する、有難いことだと思ふ気持ちになりますとね、不平は出てこないのですよ。そうでしょう。

だから、ものは考えようなので、感謝するという気持ち、それは感謝すれば不平不満がなくなりますから、心が朗らかになる。朗らかになると、友達にも友情も厚くなるだらうし、人生が愉快になるだらうし、自分の世界がずーと豁然として開けるのですから、そういう意味で、私は塾創立以来いつも一年生諸君が入塾を機会に「感謝ということだけ忘れないうて下さいよ」といいました。

最後に、話は各論になって、さがってくるのですけれどね。どうぞ、一週間に一ぺんだけはね、一年生の諸君、よく聞いてくれ給え。お母さんに手紙を出してもらいたいです。お母さんの頭を去来するものは諸君の一日一日の行動なのです。では、電話をかけてますと、こいう。電話なんかでは、あれは出来ない。夜分勉強が済んで、静かにその日の安らかな眠りに就こうとするときに、お母さんに手紙だけは是非書いてもらいたい。一週間に一ぺん、なんでもいいから書いて、静かにお母さんと語っている気持ちになって、お母さんと対談する気持ちで、お母さんに手紙を書かれるその手紙こそ、お母さんを慰めるものであり、またその時間こそ、諸君が一日中で一番幸福な時間ではなかるうかと、私はかように考えるのであります。諸君の手紙がポンと舞いこんできたら、お母さんのこの世でのまたとない慰めであり、喜びであるのであります。お母さんにだけは手紙を是非出して頂きたい。これはね、その手紙をお母さんはポケットに入れ、帯の間にはさんでいてね、夕方まで楽しみにご覧にならないですよ。そうして夕食の膳に、「正雄ちゃんからこんな手紙がきましたよ。」などといって、そして皆で見る。妹さんもお姉さんも、ご兄弟もどれどれと行って、「ああそう、やっているんだらうなあ。」と行って、いろんな話も出るのですね。それがね、諸君が手紙をとおして家庭の団欒に書面出席をなさるわけだし、また夕食卓上に錦上花を添えるものとなるでしょうし、また諸君自身もお母さんにその書きつづられるその玉章(たまざさ)を書いておられる時こそ、ほんとうの幸福な境地に浸っておられるのです。それを毎日おやりなさいとは申しませんが、是非一週間

に一度だけは、お母さんに手紙を出しておあげ
願いたい。

以上、打ち解けた気持ちでお話し申し上げる
のですが、どうぞしっかりと信念を持った、
哲学を持った、人生観を持った人になってもら
いたい。その信念、哲学、人生観に忠実であり、
しっかりとそれとともに生きるのです。私はこ
れほど強いものはないと思うのです。

思ったことばかりいってとりとめもない
ことで大変恐縮ですが、私にくれぐれもお願
いすることは、しっかりと哲学を持つ、人生観
を持つんだ、それを模索するんだ、そしてそれ
を徹底して考えるんだ。そうして、こうときま
つたら行動に向かって一路邁進してもらいた
いんだ、ということなでございます。

そして、日常の生活は感謝だ、有難いのだ、
こうして自分からのみも願いたくないのに
健康に幸福に生かされているのだ、決して自分
が生きているのではないのだ、という有難さを、
親も有難い、兄弟も有難い、友達も有難い、空
気も有難い、鉱物も有難い、植物も有難い、動
物も有難い、いろいろなもの、森羅万象一切の
ものが有難いのだ、皆自分のためにあるのだ、
ああ、こうして自分を慰めてくれるのだ、自分
を育ててくれているのだ、育てられているのだ、
という身の有難さを心から感謝して頂きたい
のです。

私も日夜その気持ちで生きておりますの
で、これは私の体験談を申し上げるのですから
是非こうしなさいというのではないのです。こ
れをくれぐれもお勧めしたいということで、こ
ういうことを申し上げているのでございます。

よくいうことですが、諸君もいずれ私のよう
な年になられるでしょう。そのときに、お孫さ
んを膝に抱いて、「おじいちゃまはね、学生時
代に和敬塾にいたのだよ。その時はこうだっ
たのだよ」と、和敬塾ライフを誇らしげにお孫
さんに語り伝えられるような塾生活を送って
頂きたい。

私は、単なる功利的な意味で、そういうこと
を申し上げるのではございませんが、ほんとう
に自分を顧みて悔いのない、意義あるカレッ
ジ・ライフを送って頂きたいと、これが諸君に
対するお願いでございます。

長らく駄弁を弄しましたが、これでお別れい
たします。用事がありましたら、また和敬塾で
皆さんとお会いする時間もつくります。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が
用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、
当時のままといたしました。